

# 書生のことばの展開

松 井 利 彦

## 要 旨

位相語の中で、書生のことばほど、日本語の改新に関係したことばはない。また、幕末・明治初期の書生ほど、日本語に大きな影響を与えた書生はいない。

書生ことばと言えば『当世書生気質』が思い起こされ、ほく・たまえ・失敬や、外来語・漢語の多用が特徴として挙げられるが、その多くの源は近世の医学書生や医者、あるいは漢字書生のことばに求められる。彼らは学問上の言葉をしばしば日常の場で使用した。医学書生・医者にはオランダ語や漢語を使い、漢学書生は漢語や漢音を用いやすく、また、先例のない杜撰な漢語を造出することが多かった。このようなことばの使用を身につけた、幕末・明治初期の書生が、外交的・内政的な異変によって公的な仕事に携わることになり、彼らのことばを公用文の中で使い始めた。また、翻訳・著述においても書生ことばを用いた。そのために、新造語、漢音語や、漢文訓読体などが漢学の外で使用されることが普通になり、日本語が大きく変化することになる。

数多い位相語の中で、書生のことばほど近代日本語、引いては現代語に大きな影響を与えたことばはない。

昭和五三年六月一四日の『朝日新聞』に、「もはや男性専用語ではない。最近、高校生以下の女の子の間では当たり前のように使われているのをご存じだろうか」と記されている「ほく」は、ここでは、男性語が女性にも使用されるようになったことが問題にされているのであるが、本来、単なる男性語としての表現価値をもつ代名詞ではなかった。また、女性がまったく使用することがなかった訳でもない。

明治一〇年頃の成立と推定される『開花浮世都々逸』の第五号に、  
大和詞も開けて今は漢語交りの君と僕注1

という俗謡が載っている。文明開化を迎えたために、和語の人称代名詞から「ほく」という漢語に移ったというのであるが、一般の男性語「ほく」を詠んだのではないと考えられる。黙阿弥作『女書生』(明治一〇年初演)に「彼処あそこや此処ここへ下宿げしゆくを借り多数あまたおちこ落おちこ込む書生しよせいの交際つきあ、君の僕おれの口には言へど、心の内はうぬのわれ」とあり、また、

明治一八年の『自由燈』の社説に「君や僕の諸生言葉」と記されているように、「ぼく」は書生のことばとして取り上げられているのである。「当世書生氣質」(明治一八年・一九年刊)においても、書生の特徴的な一人称は「ぼく」と「我輩」である。遡ってみると、『安愚楽鍋』(明治四年・五年刊)に登場するはずであった書生は「ぼく」を使っている(明治四年刊『西洋道中膝栗毛』第六編下所載の広告による)。さらに、『一説 明治浮世風呂』(明治二〇年五月刊)の、若旦那と出入りの男との次の会話からも、「ぼく」が普通の男性語ではないことがわかる。

清「其上彼の氣違ひ娘にやア御氣が疲れやしたげ此の間も僕が若「僕た誰の事だ 清「ナニ自己が一杯機嫌で一風呂とびこんで例の喉で都々一を一ツ迂鳴て居ると(第一回)

清八が若旦那に向かって「ぼく」と言ったのを、若旦那はとがめている。明治二〇年頃には、「ぼく」は誰もが使えるという性格のことばではなかつたのである。もつとも、清八が使おうとしているように、この頃には「ぼく」の使用層が広がりがつた。既に小学生の男子も使うようになっていた。同書の「阿房だら経」に、  
 ムツナ、七歳や七歳ノワシ、小僧モ馬鹿ニヤナラナヒ小学読本作文算術ケイ古ラスルカラ文久ノ飴デハ中々不承知ぼくときみトノ漢語デ挨拶アタマ禿テヒ親父ハ閉口オふくる迷惑(第七回)

とある。誇張はあるが、当時の状況を示しているものと思われる。また、同書では、人情本を地方へ行商に行っていた男が「おれ・てめえ」のなかに「ぼく・きみ・たまえ」を交えることがある。代言人が「ぼく」を使うことは既に『当世書生氣質』に見えている。『新浮世風呂』(福地桜痴作 明治二七年刊・二八年再版)になると、政党员・

新聞記者が「我輩」に交えて「ぼく」を使うほか、相場師も「ぼく」を用いる。代言人や政党员・新聞記者の「ぼく」の使用は書生上がりであるためであろう。さらに、『新浮世風呂 男湯之巻』(海賀菱哲著 明治四〇年四月刊)になると、官吏・小説家は勿論のこと、丁稚も「ぼく」を使い、また、職工・床屋の下刺しも「あつし」「おいら」に交えて「ぼく」を使うことがある。

以上のように「ぼく」の使用層は拡大するが、女性が「ぼく」を使用することは稀である。しかし、芸者が客のことばをまねて使うほかにも、次のように女性の使用はあった。

貴女の製造を以て自から任する或る府下の学校は頗る西洋主義を以て教育せられ音楽舞踏の催しも時として聞くことあり其学校の女生徒は固より嫺雅優美を以て文明の貴女たるに背かざるの風儀あるへしと思ひの外其平素の言行実意外なるものにて所謂書生風染み僕は二匹立の馬車に乗るの人にあらざれば決して婚せず君は常に秘書官の細君たらんことを希望せり僕は異日女学校を興して其校長となり一生人の妻とはならじ

〔新演説〕第三号一五一ページ 明治二三年刊

『浮世』のお勢が「ぼく」「きみ」を使っているのも、相手が書生上がりであることが関係しているかもしれないが、主因は、話し手のお勢自身が女書生であるからであつて、書生ことばとしての使用であると考えられる。しかし、その後、女性の間には広まらなかつた。ところが、最近になって、女生徒が使うようになり、先ほど引用したように新聞に取り上げられたのである。

ところで、「ぼく」は明治になって使われ始めたことばではない。

近世において既に使用されていたことばである。「雑文穿袋」(安永八年一月刊)に「足下貴様」「不佞拙者」「僕同」と記されている。これは「扱これからお断申詞をあらましお覚へなざる」と詩文章家のやからと御出会の扱はなしか出来ませまつた手紙などへもちよびとおあいしらひなさるかよひ……手紙文などのことは「(六ウ・二七ウ)として挙げられているものである。吉田松陰は、手紙で、妹には使わないが、兄・友人・門弟などに対しては使用している。

この「雑文穿袋」より先、「間合早学問」(明和三年一〇月刊)にも「足下あなた」と「不佞われら」と「僕われらといふこと」と書かれている。なぜこのような漢語の人称代名詞が列記されたかと言うと、「今時の学者は。常にむつかしき詞を。もてあつかふゆゑ。たまさかに。今時の学に出あひて、物語など間に。常に聞なれぬ詞おほければ。合点ゆかぬ事おほし。今こゝに其あらましをしるし。物語の一助とす。」(一八ウ・一九オ)ということである。

「ぼく」について、「間合早学問」と「雑文穿袋」とで共通するのは、漢学者が用いるということである。このことから、「ぼく」は、漢学者が使い始め、それから書生の愛用することばとなつたものと推定される。「安愚楽鍋」で武士や、新聞好き・生文人などが「ぼく」を使っているのは、そのためであろう。武士や、新聞好き・生文人などは、書生であることを通過している人物で、それゆゑ、書生のことばと重なる面があるのだと考えられる(生文人の話は後出の「阿蘭陀鏡」に登場する書生、犬順と話題が共通する)。

「ぼく」は、近世においては漢語の世界のことばであり、書きことばであると同時に話しことばであつた。ただし、明和の頃は、ま

だ「常に聞なれぬ詞」であつた。やがて明治になると、書生といえ「ぼく」が思い起こされるほどに書生に頻繁に使用されるようになる。そして、さらに使用圏を広げて現代語に至るのである。

## 二

ここで言う書生は、今の学生と同じではない。書生が、食客であり、玄閑脇の部屋が与えられて、来客の取り次ぎなどの雑用をすることを除いても、そして、

客歳より此に食客して学びの窓に螢雪の勉勵を積む書生あり

……法科大学の学生なり(緑叢談 前篇)明治一九年二月凡

例 明治文学全集(五)二六〇・二六一ページ)

入来るは二個の書生……某学校の生徒なるべし。何れも廿

五六の壮漢なり(新浮世風呂)四・五ページ)

のように、「学生」や「生徒」が同義語として使われることがあるにしても、「書生」は現代の学生・生徒と同じ身分ではない。

書生は、明治の初期では「学校の籍を問はず、凡そ修業中にして未だ就職せざるを悉く書生と称し」(三宅雪嶺「同時代史(二)」)注8)ていた。また、職に就いているにもかかわらず、官員でないために書生と言われることもあつた。「猶だ年の若い准教員で、昼間は小学校を教へて夜は法律学校と語学校とへ通つて勉強し、将来は立派な官員様になる下稽古してゐる」先生は、「木葉書生の学校教師風情」とも紹介されるのである(内田魯庵「破垣」・「破垣」について)注9)。近世でも、未熟で修行中であると認められる場合には、職を持つていても、書生と呼ばれることがある。それは、「浮世床」(文化一〇年・一年刊)で、素読指南の先生が「貧書生」と説明されていることに

も、また、「洒落本『阿蘭陀鏡』(寛政一〇年刊)において、「病人の死だ跡へ見廻たやうなものだ」と。医者たけのたとへをいひ」と記されている斑毛斎大順が、「江戸化言の諸生」と作者に紹介され、遊女に「すかぬ諸生客で。葉の名のやうなことばかりいひくさる」と嫌がらされていることにも、示されている。

書生は、大きく漢学書生と洋学書生に分けられる。年齢は、一〇歳台の者もおれば、既に引用した『新浮世風呂』に見られるように二〇歳台半ばの者も多くいる。また、老書生もいた。そして、著述や翻訳を行う者も多い。「僕とても翻訳や著述で一身を養ふに六ヶ敷(こと)はないが」(『雪中梅』上編第三回)というのは理想を述べたものであるが、「僕をお待兼ねの御様子は、何か書物を翻訳の御用向きでもござるか」(『女書生』)と言つてもおかしくない力を持つていた。尾崎行雄が田口卯吉の人物を語つて、「明治の初に名を成した諸大家中には、早熟者が多かつたが、君も亦其の一人にして、日本開化小史や、日本経済論を著して、一世を驚倒したのは、年齢僅かに廿二三、今なら青書生にして、世間から小僧扱ひをせらるべき歳頃で有つた」と述べている。明治初年の書生はこのようであつた。また、維新以前でも、書生が「藩政を改革して洋学を盛にするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云ふこと」を建白することがよくあつた(『福翁自伝』)。書生は活動的であつた。

書生の目指すところは、嘉永四年(一八五二)生まれの伊沢修二の自伝『漢石教界周遊前記』によく出ている。

東京に出た余も、一たび貢進生たるの運命に逢つてからといふものは、身には一定の資格が備はつて大学南校の学生となり、

学校に出で、は正則の勉強を為し、卒業の日は即ち登竜門に入るの日である、そこで當時余は将来外交官にならうと思つた、といふのは故郷に居つた時から漢訳の丁建良(マーテンウイレル)氏万国公法といふ書を有つてをつた、これは中々読み悪い書物だけ共、これを何遍とも数知れず読んだ、その他外国の形勢に関する和漢の書物を読んだ、何でも外国と対立するには、外交と兵力とを盛にせねばならぬと考へ、而して自分は天晴れの志といふものは皆此様のものであつて、嘗つて、憲法の訳書を読んで大政治家にならうといふ志を立て、其後種々の事情から志が酬いられず、中頃から工学を学んで技師となり、或は理学者になつた者もあるが、貢進生時代に、工学者や理学者になりたいなどいふものは一人も無く、未来の大政治家、大外交家、大軍人を以て自ら居つたものである。随つて書生中には議論が盛に闘はされ、燬芋を嚙りながら治国平天下の策を講じたのであつた、

この伊沢修二が上京するまでに書生としてどのような学問をしたかは、同書に次のように記されている。

十二三歳の時既に四書五經の素読及講義を了り、それより和漢の歴史唐宋八大家文の無点讀誦を為し、余暇には詩を作り文を属し、又和歌俳諧の道にも心を寄せた。……十五六歳以後に於ては、身は漢学の校舍に在りながら、専ら思を和洋二学に馳せた、乍併当時洋学科の設がなかつたからして、一に和漢の翻訳書に頼るの他は無かつたが、幸にして科学、文学、数学、兵学、法学等の諸学科に互り、当時世に行はれた翻訳書、博物新

編、格物入門、舎密開宗、氣海觀瀾、嘆喏喇紀略、地球説略、  
数学啓蒙、海国兵談、鈴録七書、万国公法などの書は、幾回閲  
読したかわからぬ程であつた。

この文章から、幕末、明治初期の書生が、古典漢籍と共に、欧米  
の新しい文明を知るため、日本人の翻訳した書籍の外に、中国在住  
のキリスト教宣教師が漢訳した書籍も読んでいたことがわかる。書  
生は、このような漢訳書や翻訳書を通じてことばを修得し、そして、  
それを議論や建議書、著書・翻訳書の中で使用したに違いない。学  
問修行のなかで得たことばを日常の場で使つてみるのが、書生であ  
る。

### 三

書生と言えば、『当世書生氣質』が直ちに思い起こされる。それほ  
どまでにこの本の存在は大きい。そのために『当世書生氣質』に登  
場する書生が、「ぼく・我輩・きみ」や、補助動詞の「たまえ」、助  
動詞の「べし」、挨拶に「失敬」を多用することや、外来語を頻繁に、  
また、漢語を多様に使うことなどについては、既に論じられている。<sup>注15</sup>  
しかし、これらの言語的特徴のすべてが『当世書生氣質』から始ま  
つたのではないことは、「ぼく」の場合と同じである。

『阿蘭陀鏡』(『洒落本大成』)による。洒落本は以下でも同じ)に  
医学生が登場することは前に述べたが、彼の仲間には、「犬君足下右の  
花寶賢くはひんけんのせりふどうした花寶賢とは諸生仲間仲間で美婦を云」(巻之二)といったことばを使  
う。犬順のことを犬君と、君づついで呼ぶのは書生ことばである。「花  
寶賢」が書生ことばであることはいままでもない。また、

〔通〕斑毛齋足下のトクヘン如何はんもうしやうそくか片カナは皆異かた (犬) 不佞大ふたいお

ドロンコに及び候。……：ラマンなんとだ(巻之四)

のように、「学者らしい顔さへすればほれる物かと思ひ。二ツ三ツ覚  
へた異国いこくことばをつかひ無性にむじやうこびて、高号きやうごうをよぶ」のである。「大  
ドロンコ」は医者仲間の通言であつたために書生も使つたのであ  
らう。先行の洒落本「繁千話」(寛政二年刊)で、「よほどよろしき医者  
の息子むすこ」とも医者とも紹介されている犬悦は「不佞は大ドロンコに  
及サ」と言い、これについて「紅毛べにぐさのことばに酔た事をトロンコと  
云是医者いしやの仲間なまにてよく云しやれ言なり」と記されている。

医者は仲間言葉以外のオランダ語を使うことがある。「女郎買之糠  
味噌汁」(天明八年刊)における医者の呑庵のことばは次のようなもの  
である。

わつちやアフロウよりウエインがい、おみよさん一ツつぎな  
をつとよしくと一ツのんで千丈へさオフロウとは女の事ウエインとは  
酒の事いづれもおらんだことばなりこのいしやおらんだがくとみへたり

これ英江さんわつちやアロードゲシクトになりやしたるふねグ  
ロウトにせつなふごぜへすもふウエインはやめにしてちつとヒ  
スクでもあらしやしよふロードゲシクトはかほのあかき事  
也ヒスクは魚なりいづれも蘭語也

茶屋の娘や、同行の者に対してもオランダ語を使い、また、遊女  
とも次のような会話をしている。

〔呑アン〕セールトロンコくア、しまいのコツヒイで巻ツがす  
ぎたそうな、ながらむねをなでる (住の戸)ぬしもとんだとふじん

だね……そんな事はながさきとやらへでもいつていゝなんすりやアよおすに……〔呑〕そんならもふいゝやすめいア、ウインわいやだがスマツカがなんぞくいたい〔住の〕それいふまいといゝながら又いゝなんすほんの毛とふじんだねスマツカとはなんの事だへ〔呑〕むまいものゝ事さ

ここで使われているオランダ語を、石綿敏雄氏の注<sup>16</sup>を参考にして記すと、フロウは vrouw (女) ウインは wijn (ワイン) ロードは rood (赤い) ゲシクトは gezicht (顔) グロウトは groot (大きい) ヒスクは fische (魚)？ セールは zeer (非常に) トロンコは dronk (酔った) コツヒイは kopje (酒杯) スマツカは smak (美味) であり、難しいことばはない。このように、学習した外国語を口にするのが医者であった。書生も同じであり、明治になると、『当世書生氣質』や、『緑叢談』に登場するような「言語のうちに英語を挿さむ」書生の数が増え、世相として描写されることになるのである。

漢語の頻用も、近世の書生や医者に遡って見られる。『間合早学問』『雑文穿袋』に漢学者と話すときに用いる漢語、手紙にちりばめて見栄えのする漢語が挙げられていることは前に述べた。次に少し列举する。<sup>17</sup>

- 迂遠まはりとは 閑暇ひまなる事
- 劇場しばい 雑駁物のまじり
- 豚児せがれ 睥睨人を見くだすこと
- 落魄おちぶれる 銘酌酒にまじつふるゝ
- 閑暇ひまなる事 賈物にせもの
- 知己ちかづき

(以上「間合早学問」)

- 怨恨うらみ 會計勘定
- 甘藷さつまいも 脚色しくみ
- 猜疑うたかた 細君妻
- 酌量りやうけん 香修おこる
- 同僚同様 躊躇ためすみ
- 睥睨高きところより見おろす 媒酌なかだち
- 狼狽うろたへる 夫人おく様
- 喝采やいやくなどほめることば
- 傲慢うぬぼれ也
- 滋味うまいもの
- 痛飲大酒のこと

(以上「雑文穿袋」)

このような漢語を、書生や医者も実際によく口にしていたと考えられる。洒落本において、漢語を多用する人物と説明され、また頻繁に漢語を使用する人物として描かれているのは、次のように書生であり、医者である。前に引用した『繁千話』の犬悦と、馬骨の会話は次のようである。

〔犬〕どふして見ても欲ほしく心家しんかだよいつたいあすこの内の老杉らうせん板いたがまづきさだ首にてやり手の事也……ぜんてへ此ぢうのばんあいつと理論りろんした時イレフヒ跳槽キレルのきもをこつたが……此子たちもをつつけ一個の名妓めいぎになるだらう嗚呼あゝ抗籠せりうとでかけたい

〔馬〕どこへいきたまふ 〔犬〕小解せうかいに去さるのさ唐の俗語をあそここ……きりぬいておぼへてゐるゆへしつたか  
 〔馬〕漱そくをしにゆくのか 〔犬〕……いんにや小べんにいくのよ……あまり退屈たいくつなれば保養ほやうのため空そら小便せうべんをたれて来てもまた来らぬハ

犬悦の使っている「跳槽」「梳櫛」は「雜文穿袋」に掲載されている漢語である(ただし、後者は「梳籠みづあげ」である)。犬悦は他に「雜文穿袋」に挙げられている「痴漢」(馬鹿者の意)も使っている。

『阿蘭陀鏡』の書生、犬順も「流石医者だけあつて、聞はつゝた俗語を間違ながらおりくつかふ」のである。

一体最初は沈脈ちんみやくの症しやうのやつだ。そこで内へいれる約束やくそくもした

よ。夫が段々だんだん浮脈ふみやくとなりおつたゆへ。所詮しよせんだと思ひ去縁きよえんした

が。あの婦人も雀躍じゃくたつの症しやうと変脈へんみやくだりト脈論でせ

と仲間の通見に向かつて言い、遊女に対しては、

イヤ中々ちゆうぢゆうさやうの儀は毛頭もうとうこれなく。兼かね足下そくかの美目びもく盼はん

たることを。拙つたき此身に耳入みみいりいたし。願ねがくは一刻片時いせつぺんたりとも

嬌面けうめんの枕まくらをかわさん幸縁きやくえんのなきやおもひしに。今当席いまとうせきの次第しだい。

近ちか比ひ歎服たんぷく仕しル。……イヤかけ物にする自作じやくの詩文しぶん書かけいの。

イヤ能興業のうきうぎやうする出勤しゅつじんして呉くれひのこと。遊事ゆうじに殆たいてい込こまるよ

といったような、専門語や生硬な漢語を用いる。漢語を「博学はくがくといふ所を見せん」と、体言としてだけでなく、サ変動詞としても多用し、形容動詞にも使うのである。学問に携わる者は、医学生でな

くても同じであった。『童子通』(天保一五年刊)に、

少シク文字ヲヨム者ハ、平日ノ談話ニモ、漢語ヲ遣ヒタガル者

也、自慢ラシク、幼者ニ似合ハヌモノソ、(三八ウ・三九オ)

と記されている。書生ことばとは、正しくこのようにして使われ始

めることばである。『西洋道中膝栗毛』に掲載されている『安愚楽鍋』の広告中の書生、「そうはつ」と「ざんぎり」のことばに非和語的性格が強いのも、学問の反映である。彼らの漢語使用率を、『安愚楽鍋』の他の登場人物の漢語使用率と比べると次のようになる(『安愚楽鍋』の漢語使用率は鈴木英夫氏の論による)<sup>注18)</sup>。

鄺武士(三九・八) そうはつ(三七・五) 新聞好(二三・

七) 藪医生(三一・〇) 生文人(二五・九) 士(二四・

七) 西洋好(二三・五) 馬(二三・四) 町人(二〇・

八) ざんぎり(二〇・六) 商法個(二七・四) 芝居者

(二六・九) 以下省略

同じ書生であっても、「そうはつ」と、「ざんぎり」とでは、総文節数に対する漢語の使用率が大きく違う。これは、「そうはつ」が今は洋学者流であるが、元は漢学者流の書生であったのに対して、「ざんぎり」は元から西洋学流の書生であつて、外来語を多く使っているためである。外来語を非和語要素として漢語に加えるならば、「ざんぎり」の非和語要素の使用率は三〇・三となり、「そうはつ」と、さほど違わないことになる。書生の学問が、そして、その分野が日常のことばに反映することを、二人の会話は示している。洒落本に登場する書生や医者のことばも同様である。

#### 四

書生は、学問を修めることによって、外来語を使うようになり、漢語を頻繁に使用することになるの外に、どのような言語的特徴を持つにいたるか。そして、それがいかように他に影響を及ぼすか、次に少し考えてみたい。

明治二六年一月に高橋五郎が編集した『袖珍石版和漢雅俗いろは辞典』には、見出し語に、一つの特徴がある。同義の異形漢語が掲出されていることが多い。

いんみつ・おんみつ (隠密)	きやうだつ・がうだつ (強奪)
かいたい・けだいたい (懈怠)	さいぶつ・さいもつ (財物)
いちよく・しやうぢき (正直)	せきはう・しやくはう (釈放)
へいとう・びやうどう (平等)	ほうぞん・ぼぞん (保存)
ざう・もざう (模造)	りうざい・るざい (流罪)

このように、当時通用の吳音形や慣用音形のほかに、同じ意味の漢音形が記されている。これは本辞書の「漢音」の項に、「日本に伝はれる支那音の一にして今専ら行はる」と記されていることの現れであるが、この「専ら」は言い過ぎであり、通用形とは別に掲出されている漢音形は書生ことばである可能性が高い。なぜならば、漢学においては、漢文は漢音・正音で読まれることが多く、したがって、漢学の場合では、漢文訓読音と講釈音とが位相的な対応をなすことがあったからである。そのため、<sup>注10</sup>「書生ヤ、モスレバ俗間通用ニモ漢音ガ勝ツモノ也」(「童子通」九ウ)であった。この訓読音が『いろは辞典』の掲出語に及んだのだと考えられるのである。

明治初期の漢語辞書の字音が複雑で、一定していないのも、<sup>注20</sup>漢字における訓読音が書生を介して関係しているためであると考えられる。関根正直が、

維新以来、漢語ノ流行一時甚シク、漢語字類、熟語類撰ナトイフ書ハ、汗牛充棟スル程出来、当時ノとゞいつトイヘル俚語ニモ、僕は近頃教師をやめて、漢語字引で苦勞する、トイヘルガ

アリシ程ニテ、(国語ノ本体并ヒニ其価値)「東洋学会雑誌」二ノ三  
明治二一年一月二〇日)

と記しているように、漢語辞書が書生上がりの手で編集されることがあった。というより、おそらく漢語辞書のほとんどが、書生上がりか書生によって作られたであろう。そのために、この時期の漢語辞書に訓読音が混入し、訓読音と日常音とが併存することになった。複数の漢字音が漢語辞書に記されているのも、書生ことばの反映なのである。

書生は未熟である。作詩において心余って言葉足らずの時がある。その場合、「言タイ」ガ、イエヌトテ、我マヽニ手作リノ語ヲ下ス」ことは「杜撰」として非難された。「二字三字ノ熟字ハ、必ず古人ノ手ニフレタルヲ取ルベシ」(「童子通」四一オ・ウ)であった。この記事は、漢詩を作るときに心得を記したものであるだけに、逆に、書生が作詩において「我マヽニ手作リノ語」を使うことがあったことを示している。文学の外ではなお「手作リノ語」は多かつたであろう。

維新以降ではこの種の漢語が氾濫した。「近来、漢学未熟ノ人ナドノ、自己流ニ手製シテ記ス熟語ナドハ、漢字ニ書キテモ、佩文韻府ハ勿論、立派ナル漢学先生ニモ分カラズシテ困リ居ル程ノ次第」であることが明治一六年一月一八日の『朝野新聞』に出ている。<sup>注21</sup>しかし、新漢語について、「社会」の熟字古書に見当らず世の風潮に従つて無稽の文字を用ふるは耻べき事と思はる」とか、あるいは、「日月開明の世なれば、必ず古語にのみ拘泥すべからざるも、大抵事<sup>注22</sup>がらと字義と相当る熟語<sup>注23</sup>を用ひざれば、文章に綴りて、他方の人に示す事も出来難きなり」と言っていたのは、押し寄せる欧米の文

明を受け入れることは困難である。古人の用例があるとか、古書に見えるとか、また、字義にかなっているとか、そのようなことに拘って彫琢していたのでは間に合わない。幕末・明治初期には、杜撰と言われようと、素早く新漢語を作つて、欧米の文明に対応する必要があった。その点で、新語の造出は、修業中であるがゆゑに伝統に束縛されることが少なく、新しいものに情熱の燃やせる、そして、多分に冒険的な書生にして初めて可能であつた一面が存したことを認めない訳にはいかない。このことは一七世紀以降、特に一九世紀に中国在任のキリスト教の宣教師が、中国語が母国語でないために漢訳語を造出したのと事情が似ている。

明治維新以前の武士のことは、役人のことを崩壊させたもの、そして、文章を難しくしたのも書生が係っていると福地源一郎は次のように言っている。

旧幕封建時代には学校にて国語をこそ教へざりけれ、士人は勿論、農工商にても、少しく身分ある輩は家庭にて物の言様を教へ、粗言なきを慎みたり。官吏の如きは猶更にて、仮令小吏輕輩たりとも、言語の粗野なるは其職を奉ずるに於て第一不合格の重点たりき。当時俗間にて貴殿に拙者、左様、然らば、差出たり、罷越たり、御意を得申し、御同意いたすと嘲りたる武士詞は即ち是なりけり。

此武士詞、又は役人用語とも名けられたる莊重の言語が、幕府に於て漸く行はず成り初たるは、嘉永六年癸丑六月三日に亜米利加の彼理が使節として軍艦に搭じ、江戸湾に乘入りし時に当り、幕府が俄に人材を求め、昌平学校の及第生および其他の方面より、才幹学識ある輩を登庸せしに、其輩は概ね書生出身に

て官府の礼節言語に倣ざるを以て、其言語も自から書生風に流れて崩れ出し、同時に又其輩の建議、答議、評議書の如きも亦自から漢語を多く交へ、時として漢文体の文字を挿入したるより、文章と言語と反行するの端を啓き、諸藩とも同じく斯の如く成りて、以て今日言文の因と成りたること事実なり。然れども、幕府の世を終はる迄は未だ明治以来今日の如くには甚しからざりしなり。之を要するに、日本上流の言語は書生風の為に崩れ初め、維新の時より各藩の英雄豪傑が要路に立ちたるにて全く破れて、遂に今日の状況に至れるなり〔言文一致〕<sup>注24</sup>『日出

国新聞』所載 明治三四年一〇月二七日。

福地源一郎は、また別のところで、「維新以来廟堂の上に立て樞機に当れる元勳諸公の如き若くは文壇に立て新日本の文物を勸奨せる諸先輩の如き大抵旧日本の頃には学生<sup>注25</sup>」であつて、そのために、書生上がりが日本語にいろいろな影響を与えることになつたと述べている。前島密も、「近日漢学生の世に志を得たるより俄に文書の体裁を変じ、官文私書とも稍、漢文体に擬せんとするの勢を生ず」と記している。福地源一郎・前島密の二人は、漢語を多く交えた漢文直訳体が公文書などに使用されるようになったことを非難しているのであるが、漢文直訳体の文章が、それ以前に存在していなかつた訳ではない。ただ、近世では学問の世界のなかに留まっていたために、その文体が問題にされなかつたに過ぎない。ところが、幕末・明治になつて、書生がその文体を学問の外に持ち出した。その結果、漢文直訳体が一般に使用されることになり、その後の文体を決定したのである。

書生ことばのなかには、仲間のことばとして内輪で使用されるの

みで、目だちはするけれども、一種の風俗を彩るだけに終ってしまつたものもある。しかし、幕末・明治初期について言えば、以上ではその一部を見たに過ぎないが、書生や書生上がり<sup>注9</sup>が新事態に対処すべく、また、新しい社会・文明を作るべく活躍の場が与えられたことに伴って、書生社会の外で広く使用されることになつたものも多い。その結果、書生ことばは近代日本語の形成に大きく関与することになつた。

なお、書生ことばの展開としては、書生を通じて欧米語から受けた影響も無視することができない。本稿では触れることができなかったが、深く大きいものがあることを付け加えておきたい。<sup>注10</sup>

注1 「明治文化全集」第八巻 五四〇ページ。

注2 「黙阿弥脚本集」第廿一卷（大正十一年春陽堂刊）四六二ページ。

注3 朝寝坊「東京語の通用」（明治十八年六月三〇日『自由燈』所載）山

本正秀著『近代文体形成史料集成発見篇』による。

注4 小松寿雄「二歌当世書生気質」の江戸語的特色（埼玉大紀要）九 昭和

和四九年三月）、鈴木英夫「当世書生気質」に見られる人の呼び方」（共立女子短大紀要）一八 昭和四九年二月）。

注5 愛柳癡史笑閣・浮世粹史戯著 共隆社刊

注6 前掲「二歌当世書生気質」の江戸語的特色」二六六ページ、「当世書

生気質」に見られる人の呼び方」二七七ページ。

注7 「ぼく」の使用層の広がり<sup>注9</sup>を考察したものに次のものがある。加藤照

美「明治期における『ぼく』の用法」（日本文学ノート）一六 昭和五六年一月）。

注8 昭和二五年・昭和四二年 岩波書店刊 五一ページ。なお、書生については、進藤咲子『明治時代語の研究』（昭和五六年一月 明治書

院刊）一一九ページを参照。

注9 「社会百面相」（岩波文庫）二七八ページ・二四八ページ。

注10 「黙阿弥脚本集」第八巻 四九三ページ。

注11 塩島仁吉編「鼎軒田口先生伝」（明治四五年五月 経済雑誌社刊）四三〇ページ。

注12 岩波文庫 一六七・一六八ページ

注13 伊沢修二君還暦祝賀会編 明治四五年五月刊 一五・二六ページ。

注14 右同書三・四ページ

注15 前掲の小松寿雄氏・鈴木英夫氏の論考の他に、池上禎造「近代日本語と漢語語彙」（金田一博士古稀記念言語民俗論叢）所収、昭和二八年六月刊。「漢語研究の構想」に再録、昭和五九年七月 岩波書店刊、辻村敏樹「当世書生気質」の外国語・外来語」（松村明教授 還暦記念国語学と

国語史）所収 昭和五二年一月刊、飛田良文「書生の敬語」（国文学）第二六巻二号臨時号 昭和五六年一月、中島尚子「書生ことばの語彙研究」（語学と文学）一五 昭和六〇年三月）など。なお、木阿弥作「女書生」の書生ことばを論じたものに、杉本つとむ「転換期の日本語」（近代日本語の新研究）昭和四二年九月 桜楓社刊）がある。

注16 「オランダ語から英語へ」（言語生活）二九一号 昭和五〇年二月）。

注17 「日本語の歴史」6（昭和四〇年五月 平凡社刊）八一ページ

注18 「安愚楽鍋」にみられる漢語とその表記について」（共立女子短大紀要）一五 昭和四七年二月）。なお、漢語使用率は調査単位によって違った結果が出、土屋信一氏の「浮世風呂・浮世床の会話文の漢語使用率」（国語語彙史の研究）八 昭和六二年一月に「安愚楽鍋」について別の統計が示されている。しかし、ここでは比較の必要から鈴木英夫氏の調査単位に従った。

注19 拙稿「明治初期の漢音と呉音」（国語国文）第三八巻一―一四 昭和四四年一月）、「近世漢学における漢字音の位相」（国語国文）第四

○巻五号 昭和四十六年五月。

注20 拙稿「明治初期漢語辞書の系譜」(山田忠雄編『国語史の為に』第二部所収。昭和六一年五月 笠間書院刊)。

注21 吉田澄夫・井之口有一編『国字問題論集』上巻 一四五ページ。

注22 石川鴻斎「論説 流行言語」(『風俗画報』六九号 明治二十七年三月一〇日)。「二重括弧は筆者が付けた。

注23 寵仙子「流行言語(第三)」(『風俗画報』七六号 明治二十七年八月一〇日)。

注24 『明治文学全集』第一巻 三九五ページ。

注25 「明治今日の文章」(『国民之友』二〇六号 明治二十六年一〇月)。前掲『近代文体形成史料集成差成篇』による。

注26 「国文教育之儀に付建議」 明治二年(吉田・井之口編『明治国語問題論集』四〇ページ)。

注27 この問題については、鈴木英夫「明治東京語の過渡的性格」(『国語と国文学』第五四卷九号 昭和五二年九月)が参考になる。

——京都府立大学教授——